会話ダイアログ暗唱に従事させる外国語指導法がスピーキング時の定型表現の使用と暗記学習に及ぼす影響に関する基礎研究

松崎武志

第二言語習得および認知心理学では、Formulaic Sequences（定型的な単語［あるいは形態素］の連続：以降 FSs）が記憶内に独立的に保持されているとされている。本研究は、第二言語学習への理解、および指導・学習のストラテジーとして FSs を暗記することの効果の可能性の探求において貢献することを目指している。本論文内では、留学準備をしている学習者にとって便利となることが期待される FSs を含むように作られたダイアログの暗記と暗唱タスクを一学期間に渡って与えられた学習者を研究対象としたプロジェクトの報告をするものである。

FSs とは、一続きの言語情報を指すわけだが、中でも「各構成要素と残りの要素との関係が比較的に固定化されており、かつ、連続体の一部を同一カテゴリーの別のものに置き換える際に比較的に制限のある連続」と定義することできる（Wray & Perkins, 2000）。FSs 現象は、長きに渡り応用言語学の関心事となっており（e.g., Bolinger, 1976; Fillmore, 1979; Pawley & Syder, 1983; Wray, 2002）、コーパス言語学にとっての核であり（e.g., Sinclair, 1991）、そして“レキシカル”と分類できる多様な指導アプローチの中心である（Lewis, 1993; Nattinger & DeCarrico, 1992; Willis, 1990）。FSs が大きな関心を引き寄せる理由、かつ、その厳密な定義付けが難しい理由のひとつは、FSs が言語使用に満ちあふれていることにある。FSs は、人が持つ語彙の相当部分を

占め、必須のものである。そして、メッセージの理解と発信を助ける上で最も重要な役割を担っている。したがって、言語教育における重要なターゲットとなるものである。その上で、「いかにして教えるのがよいのか？」という疑問は、教授的言語習得の分野における大きな関心事となっている。

本論文の第１章では、論文内で報告する研究の背景を議論する。その際、研究フォーカスが（特に日本の大学という）外国語環境において文章暗記（text memorization）によるFSs指導であることを述べる。

第２章では、まず、関連文献で議論されている多様なFSsの特徴を検討する。その際、本研究の基礎となるFSsの性質について議論する。本章はまた、FSsの概念を検討し、人がいかに言語チャンクを処理し習得するのかについて詳細に述べる。本章の最後では、FSsと言語学習の関係性を説明し、その関係性が意味する外国語環境での学習における示唆にも触れる。

第３章は、言語情報の処理と保持について議論する。本章はまず、言語理解と発信に関する理論モデルを検討する。次に、認知的な情報処理、学習について議論する。その後、第二言語におけるFSs習得を困難にする言語特性、そして、思春期以降の学習者が外国語環境で学習する際の制約について議論を展開する。本章の最後では、それまでの議論を踏まえた言語処理・習得の統合的モデルを提示し、このモデルの含意を説明する。

第４章は、次章以降で述べていく本研究の導入として、まず、前章までの議論を踏まえた３つの問題点について議論する。３つの問題とは、すなわち、【１】「特に大人を対象とした外国語環境における指導において FSs にフォーカスした指導をすべきか？」、【２】「フォーカスすべきである場合、どのようなFSsを教えるべきか？」、そして【３】「どうやってFSsを教えるべきか？」である。これら３つの問題に対して、前章までに議論してきた様々な理論モデルを当てはめながら、それぞれ、答えの可能性を多角度的に提示していく。とりわけ問題３については、多様な指導アプローチの効果や注意点を議論していく。本章の最後では、本研究のテーマとなっている文章暗記の指導効果に関する主要な先行研究のレビューを行う。このレビューでは、以下の点が先行研究で不足していることを指摘する。まず、FSs 指導の効果検証では、FSs使用がオーラル面において最重要であること、そしてピンポイントにその即時的な使用を検証するためにはスピーキングによる能力測定が不可欠とも思われるにも関わらず、これまでの実証研究では、スピーキングテストによる効果検証が欠如している。第二に、特定の暗記指導法の認知負荷に差を設定した複数処置群についての有意差研究、そして（一学期間という）比較的長期な暗記指導を施した場合の効果研究が不足している。最後に、特定の暗記指導アプローチを実施することで学習者の暗記への態度が変わるかについての検証がなされてきていない。

第５章では、第４章の最後に行った文章暗記の効果研究で不足している点を踏まえ、まず、本研究における次の５つの研究課題を提示する。研究課題１は、指導開始前に作成しておいた大量の便利なダイアログを授業時に全文暗唱あるいは部分暗唱を促すことで、一学期間、暗記作業に従事させることができるかどうか、また両方法の間に有意差が見られるかである。研究課題２は、課題１で示した全文暗唱と部分暗唱指導により、FSs を用いたスピーチ産出を促すことができるか、そして両方法の間に有意差が見られるかである。研究課題３は、課題１で示した両方法により１分間当たりの産出シラブル数で計測するスピーチ流暢さを向上させることができるか、そして両方法の間に有意差が見られるかである。研究課題４は、両方法により、コミュニケーション力を伸ばすために文章暗記をすることに対する学習者の態度を（より）肯定的に変化させることができるか、また両方法の間に有意差が見られるかである。最後に研究課題５は、課題１～４を補完する意味も含め、両方法がどの程度機能するかについて、どういった個人差が影響を及ぼすかということである。

第５章では、研究方法の詳細を記述する。まず、研究協力者としては、処置群１（TG1）が１２名、処置群２（TG2）も１２名、対照群（CG）が１１名の計３５名が本研究に参加をした。本研究で用いる FSs については、事前に、語数合計が 3,182 となるダイアログ集を準備しておいた。この教材を用い、TG1 そして TG2 の指導を研究者が行った。各回の授業では、９０分授業の最低３分の１以上にあたる相当の時間が次の点に充てられた。まず、研究者がダイアログ集から順番にいくつか、文法、語彙、発音等の指導を行った。次に学生は、導入済のダイアログの中から、各自、選択したものを授業中に覚えるか、あるいは予習段階で覚えてきたものの復習を行った。次に、暗記がきちんとなされているかどうかの確認のため、暗唱をさせ、学生同士で互いに暗唱ができるかを確認させた。暗唱パートナーがいない学生には研究者が暗唱の確認を行った。TG1 と TG2 の指導法における最大の違いは、前者がダイアログの全部暗唱を行ったのに対し、後者は特定の FSs の箇所のみ覚えればよい部分暗唱としたことである。このことにより、部分暗唱群は、全文暗唱と比較して、約３分の１に相当するテキストを暗唱することになった。指導開始時、そして指導終了時には、英語のスピーキングテストを実施し、日本語による疑似インタビューそして選択肢形式のアンケート回答による調査も行った。CG に関しても、同じテストを受け、同じインタビューとアンケートへの回答を行った。

第６章では、スピーキングテストとアンケート調査の回答の統計処理データを提示する。これに対して、第７章では、まず、統計結果を用いて、研究課題１～４についてそれぞれ議論する。主な発見としては以下の通りであった。まず、課題１については、全文暗唱、部分暗唱いずれも一学期間に及んで暗記作業に従事させられることがわかった。同様の結果が課題２についてもわかったが、覚えた FSs をそのままスピー

キングで用いることについては部分暗唱において、より有意な差が見られた。ただし、様々な要因を踏まえ、実際には全文暗唱の方がより効果があった可能性についても言及する。スピーキングテストへの応答内容の適切さにおいては、やや全文暗唱の方に多くの効果が見られた。スピーキングテストにおける発音問題のスコアに関しては、両処置群ともに有意な指導前後差が見られたが、全文暗唱は部分暗唱と比べても有意なスコア向上が見られた。課題３に関しては、FSs 使用数においては CG に有意なスコア向上が見られ、１分当たりの産出シラブル数で測る流暢さについては部分暗唱に有意なスコア向上が見られた。しかし、全体的に結論を導き出せるものではなかったことに言及した。課題４については、全文暗唱のみ、アンケート回答において、有意に文章暗記に対する肯定的な意識変化が見られた。最後に課題５については、スピーキング回答の統計結果をもとにして高得点者と低得点者を各群から３名ずつ選び、彼らのテスト結果、そしてアンケート回答と疑似インタビュー回答を交えて、１名ずつ分析を試みた。全体的に、様々な個人差がテスト結果、アンケート回答に影響を及ぼしていた可能性が見られた。例えば、本研究の授業外において、海外から来ている留学生と交流の多かった研究協力者は、顕著にダイアログ集の FSs 使用のテストスコアが伸びていたことがわかった。他に見られた点としては、コミュニケーションでよく使われる表現が便利であることはわかっていつつも、それらを覚えることには様々な理由で抵抗感を感じている学生は、暗唱はしても、事後テストにおける FSs 使用の大きな向上は見られなかった。第７章の結論部分では、まず、本研究におけるデザイン上の問題をいくつか指摘している。そして、それら問題を考慮したとしても、本研究が先行研究で扱われていない点をいくつか扱っており、FSs 指導に関心のある言語教師、そして FSs を研究テーマとしている研究者にとって新たな知見を提示するものであることが期待される旨を述べている。最後に、本研究でまだ扱われていない FSs 研究領域、そして、本研究のデータを分析する過程で新たに見つかった FSs 指導の研究領域について指摘している。